

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：42625

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00814

研究課題名(和文) 英語が苦手な学生が英語を書く力と発信する自信を高めるためのプログラムの効果検証

研究課題名(英文) Testing the effectiveness of a program to increase confidence of Japanese beginner-level learners in English to write and present in English

研究代表者

三田 薫 (Mita, Kaoru)

実践女子大学短期大学部・英語コミュニケーション学科・教授

研究者番号：30310337

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本人の英語初級学習者の英作文を測定する評価基準の確立を試みた。調査者が設けた基準による「分析評価」と、複数の評価者が印象で評価した「全体評価」の相関分析により、「分析評価」の信頼性、妥当性の検証を行った。また「全体評価」の評価者が最高評価をつけたエッセイの説明をテキストマイニングで分析し、理由を明らかにした。ライティング力向上は事前事後のテストの比較から確かめることができた。向上の要因としては、文法項目を絞ったエラー改善指導、構成と論理の表現の指導、内容の質向上の指導、短い英文を繰り返し書かせる指導、海外に発信する英文の作成や発表の機会などが貢献した可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人学生の英作文力不足は、学生が英文エッセイを書く機会が圧倒的に少ないことに起因する。書く機会が増えない理由として、英文エッセイの評価基準が確立しておらず、教員の採点負担が大きいことが影響している。本研究では日本人初級学習者向け英文エッセイ評価基準の信頼性と妥当性を、「分析評価」と「全体評価」の相関分析により検証したことで、教員の負担を減らし、かつ学生の英作文力の向上につながる点に意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, we attempted to establish evaluation criteria for measuring the English essays of Japanese beginner-level learners in English. The reliability and validity of "analytic scoring" were verified through correlation analysis of "analytic scoring" based on the criteria we established and "holistic scoring," which was evaluated by multiple raters based on their impressions. In addition, a text-mining analysis of the reasons given by the "holistic scoring" evaluators for the essays they gave the highest ratings was conducted to identify the factors that contributed to the high ratings. The improvement in students' writing skills was confirmed by comparing the pre and post writing tests. Possible contributing factors included error correction instruction, instruction in discourse markers for expressing organization and logic, instruction in improving the quality of content, instruction in writing short sentences, and opportunities to write essays to be sent abroad.

研究分野：英語教育

キーワード：英文ライティング キストマイニング 日本人初級学習者 英文エッセイの評価基準 分析評価 全体評価 相関分析 テ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

学生の英作文力不足は、単に文法知識や語彙の不足に起因するものではない。高校卒業まで学生がまとまった内容を英語で書く機会が圧倒的に少ないことが原因となっている。書く機会が少ない理由の1つが、日本人英語初級学習者向けの英文エッセイ評価基準が未だに確立しておらず、採点が手探りとなる等、教員の負担が大きいことにある。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は日本人の英語初級学習者の英文エッセイを測定する評価基準を確立すること、また学生の英文ライティングを向上させる教材と指導法を開発することである。具体的には以下の3つのリサーチクエストションについて調査を行った。

#### リサーチクエストション

- (1) 英文ライティングのルーブリックの分析評価の評価項目「内容の質」を測るために Topic Development を用いた基準には信頼性、妥当性があるか。
- (2) 英文ライティングにおいて、「内容の質」の高さを決定する要素は何か。
- (3) 学生の英文ライティング力を向上させ、英語を書く自信を付けさせる指導法は何か。

### 3. 研究の方法

リサーチクエストション(1)の Topic Development とは、元々 Wiseman (2012) の分析評価ルーブリック (analytic scoring rubric) の中の1項目であったものを取り入れたものである。Wiseman は「英文の質」を表す概念として、Topic Development (トピックの発展性) を設け、6段階の評価基準で評価する分析評価ルーブリックを作成した。本研究ではこの項目を応用し、4段階の評価基準を設けた。4段階それぞれの評価基準を明記した「分析評価」と、単にエッセイの良し悪しの印象で1から4の評価をする「印象評価」(印象による全体評価)を複数の評価者が行い、両評価の相関分析から「分析評価ルーブリック」の信頼性、妥当性を確立することを目指した。以下の4段階評価の中の「Detail 文」とは、詳しい説明や具体例を挙げて、主張に説得力を与える文のことである。

#### 分析評価の「Topic Development」の評価基準(4段階)

Level 1: Detail 文が無いもの

Level 2: Detail 文が少しあるが内容が限定的なもの

Level 3: Detail 文が複数あり、トピックが発展し内容が深まったと考えられるもの

Level 4: Level 3 の中で特に優れているもの

事前事後(2021年5月と2022年1月)のライティングテストのトピックは以下の通りである。所要時間15分、オンラインで実施した。

ライティングテストトピック「好きな場所」

自分の行ってみたいところを決め、その場所と、行きたい理由を3つ書いて下さい。海外でも国内でも結構です。以下の表現で始めてください。

The place I want to visit most is ( ) . There are three reasons.

本研究の調査対象者は、本短期大学で必修英語科目を履修する1年生である。学生161名分の前期始め、後期終わりのライティングテスト英文計322本を評価者6名が評価した。内訳は、外部評価者4名と教員2名である。外部評価者4名(日本人2名、ネイティブ2名)には、レベル1から4の「印象評価」、およびレベル4(Excellent to very good)についてその評価を付けた理由をコメントすることを依頼した。

#### 「印象評価」の評価基準(4段階)

Level 1: Very poor

Level 2: Fair to poor

Level 3: Good to average

Level 4: Excellent to very good

外部評価者4名にはサンプルとして「Topic Development」の評価基準による Level 1~4 の学生英文を示した。教員(筆者を含む日本人)については、2名それぞれが322本の英文に Topic Development の分析評価基準に基づく Level 1~4 の「分析評価」を行った上で、互いに異なっている評価については話し合っ調整した。

リサーチクエストション(2)については、外部評価者4名による印象評価で最高評価(Level 4)

となったエッセイについて、外部評価者それぞれが記載した理由説明をテキストマイニングで分析し、英文の質の高さを決定する要素を明らかにすることを旨とした。テキストマイニングには、KH Coder 3 を使用した。

リサーチクエスチョン(3)については、学生の事前事後の英文を以下の5つの評価項目で評価し、その結果から指導法の効果を調査した。

- 英文の fluency (語数の変化)
- 英文の structure (順番ディスコースマーカー, その他のディスコースマーカーの変化)
- 英文の accuracy (be 動詞エラー, because の断片文エラー, for example エラーの数の変化)
- 英文の contents (Topic Development の変化)
- 授業について学生の考えていることは何か。(学生の授業感想自由記述)

調査対象者である学生の英語レベルは、1年の初めの GTEC Academic のスコアにより、以下のよう分類した。

調査対象者(短期大学1年生 161名)の CEFR レベル

- CEFR B2, B1 レベル: 27名 (16.8%)
- CEFR A2 レベル上: 43名 (26.7%)
- CEFR A2 レベル下: 62名 (38.5%)
- CEFR A1 レベル: 29名 (18.0%)

#### 4. 研究成果

リサーチクエスチョン(1)「英文ライティングのルーブリックの分析評価の評価項目『内容の質』を測るために Topic Development を用いた基準には信頼性、妥当性があるか。」については、外部評価者4名が英文エッセイの良し悪しで判断する「印象評価」と、教員2名による「分析評価」の相関分析を行い、いずれの評価者の組み合わせも1%水準で有意に(比較的)強い相関関係が示された。そのため、「英文の質」に関して Wiseman (2012) の Topic Development を応用した分析評価の4段階の評価基準については、信頼性と妥当性が確認されたと考える。

リサーチクエスチョン(2)「英文ライティングにおいて、内容の質の高さを決定する要素は何か」については、4名の外部評価者(日本人2名、ネイティブ2名)のコメントをテキストマイニングにより内容分析した。その結果、共通した概念がいくつか抽出された。

注目すべきは、内容の展開に関連する単語が4名の外部評価者全員のコメントに現れていた点である(日本人2名では「具体」「詳細」、ネイティブ2名では「develop」「detail」)。これにより、「具体」に関連する概念が、エッセイの内容が優れていると判断されるための主要な要因であるという結論が得られた。次に、「構成」「structure」という単語が、外部評価者4名のうち3名のコメントに多く現れていることが観察された。また「構成」という単語が現れなかった1名の評価者のコメントにも「大変よくまとまった文章」という記述があり、これは「構成」を連想させるものと推測される。よって、リサーチクエスチョン(2)の「内容の質の高さを決定する要素」とは、説明が「具体的」に記述されていることと、整った「構成」で書かれていることの2点であると判断することができる。さらにテキストマイニングの結果から、英文の優れた内容を特徴づける他の概念も捉えることができた。「語彙」「vocabulary」に共起した「豊かさ」「rich」「descriptive」「varied」といった記述から、良いエッセイにおける「語彙」の重要性を読み取ることができる。また、「information」と「pack」が共起し、「content」と「lot」が共起していることから、「情報量の多さ」が高く評価されていることがわかる。ネイティブ評価者のコメントでは、「picture」に共起する語として「paint」「place」が現れている。情景をありありとイメージできるような描写を高評価の理由とするコメントが、ネイティブ評価者2名に共通していることは興味深い。これらの共起語は、優れたエッセイの主要要素の1つである「具体」性の下位概念と読み取ることができる。

リサーチクエスチョン(3)「学生の英文ライティング力を向上させ、英語を書く自信を付けさせる教材と指導法は何か。」については、2019年度、2020年度の調査で明らかになった学生の弱点を反映した内容を含む教材を用いて2021年度全クラスで繰り返し指導することにより、事後のライティングテストで有意な改善が見られた。

7つの調査項目のうち、語数、その他のディスコースマーカー、Topic Development については、習熟度別の全4グループともに事前事後ライティングテストのt検定の結果、0.1%水準で有意に改善していた。語数および Topic Development が全グループで事後に0.1%水準で統計的に有意に上昇していた理由としては、エッセイの内容を深める指導として「一行日記 Topic Development, トピックの展開」を使ってトピックを展開するための説明や具体例を示し、オリジナリティーがあることの重要性を強調したこと、またレベルが1から4までの英文サンプルを提示して比較させることで、内容を深化させる方法を学生が自ら学ぶ機会を設けた結果と考えられる。

「その他のディスコースマーカー」(Especially, for example, On the other hand, など)が全グループで事後に0.1%水準で統計的に有意に出現数が増加した理由としては、「一行日記 ディスコースマーカー」で論理表現を含む具体的なディスコースマーカーの使い方を指導した成果と考えられる。

「because の断片文の数」「for example エラーの数」については、習熟度別のいずれのグループにおいても、同エラーの 100 語あたりの出現数についての事前事後の t 検定の結果は、有意ではなかった。because の断片文エラーは「一行日記 because の正しい使い方」「一行日記 for example の正しい使い方」で繰り返し指導を行っており、学生の振り返りコメントにも、このエラーを理解できたというものが多い。今回の調査結果は、学生が頭では理解していても、必ずしも正しい英文が書けるわけではないことを示している。ライティングテストで英文の内容に意識が集中するあまり、無意識にこの間違いを犯している可能性がある。

「英文を書くことの自信」については、6 段階の自己評価で事前平均 1.97 (1 まったく自信がない or 2 ほとんど自信がない) から事後平均 3.42 (3 少し自信がある or 4 結構自信がある) と、英文ライティングの自信を高めていることが確かめられた。今回の取り組み(文法・構造・論理・内容の質の学習と繰り返し練習、実際に発信する機会)というプロセスを経て、少しずつ自信をつけている様子がうかがえた。

日本の英語学習者向けの英文エッセイ評価基準は、研究途上の段階にあり、特に英語初学者向けの評価基準やルーブリックで信頼性と妥当性が検証されたものは少ない。今回の調査結果を土台にして、今後高校や大学初年次教育で活用できる学生の自己評価ルーブリックの開発を行い、さらに学生の英文を自動評価する人工知能モデルの開発を研究課題としていきたい。それにより、教員の負担を減らしつつ、高校や大学の英語授業でまとまった内容を英語で書く機会が増えることを期待したい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 三田薫、霜田敦子	4. 巻 43
2. 論文標題 英語初級学習者のパラグラフ・ライティング 評価基準の確立を目指して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実践女子大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 65-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002260	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三田薫、霜田敦子	4. 巻 52
2. 論文標題 学生の英文ライティング力向上の分析 その3： 文法・構造・論理・内容の質の重点的指導による ライティングの習熟度別変化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Jissen English Communication	6. 最初と最後の頁 13-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002296	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三田薫、霜田敦子	4. 巻 42
2. 論文標題 学生の習熟度別英文ライティング力向上の分析---弱点克服の重点的指導によるライティングの変化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践女子大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 63-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002170	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三田薫、霜田敦子	4. 巻 51
2. 論文標題 学生の英文ライティング力向上の分析その2 -----文法・構造・論理の重点的指導によるライティングの習熟度別変化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Jissen English Communication	6. 最初と最後の頁 14-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002251	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三田薫、栗田智子、霜田敦子	4. 巻 41
2. 論文標題 東京の女子短期大学の全学共通英語必修科目における授業改善の歴史-----アクティブ・ラーニングアプローチに基づく国際プロジェクトベースラーニングに至る取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践女子大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 13-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002074	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三田薫、霜田敦子	4. 巻 50
2. 論文標題 学生の英文ライティング力向上の分析 -----Fluencyが伸びた学生の日本語の干渉によるエラーと表現力の変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Jissen English Communication	6. 最初と最後の頁 6-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三田薫	4. 巻 40
2. 論文標題 日本の短期大学授業において学生の英文ライティング力を高めるためのプログラムの探索的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 実践女子大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 19-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00001979	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 MITA, Kaoru
2. 発表標題 A Study Toward Improving Japanese College Students' English Writing Skills and Confidence: An Analysis of Students' Pre and Post Writing
3. 学会等名 The Asian Conference on Language (ACL2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 MITA, Kaoru
2. 発表標題 An Exploratory Study of EFL Japanese Junior College Students' Anxiety and Self-confidence in Sending Messages to Social Networking Sites
3. 学会等名 The European Conference on Language Learning (ECLL) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MITA, Kaoru
2. 発表標題 A study toward improving Japanese college students' English writing skills and confidence: Japanese college students' familiarity with English SNS
3. 学会等名 The IAFOR Conference for Higher Education Research 2019 (CHER) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MITA, Kaoru
2. 発表標題 An Attempt for Developing Global Competence: A Program to Improve L2 Writing Skills and Confidence in a Japanese Women's Junior College
3. 学会等名 2020 Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 MITA, Kaoru & KUBOTA, Yoshie
2. 発表標題 Three-Way Corrective Feedback in EFL Writing at a Junior College in Japan
3. 学会等名 2018 Symposium on Second Language Writing (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 MITA, Kaoru & KUBOTA, Yoshie
2. 発表標題 Effects of a Program for Improving L2 Writing Skills and Confidence in a Japanese Women's Junior College: An Explanatory Study
3. 学会等名 2019 Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	久保田 佳枝	実践女子大学短期大学部・英語コミュニケーション学科・准教授	
	(Kubota Yoshie)		
	(40803028)	(42625)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------